

Title	明六社・日本学士院と共存同衆・交詢社： 福沢諭吉・小幡篤次郎・馬場辰猪
Sub Title	Fukuzawa, Obata and Baba: the founders of voluntary associations of modern Japan
Author	井上, 琢智(Inoue, Takutoshi)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	2005
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). No.22 (2005.) ,p.229- 265
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	福沢研究センター講演録
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20050000-0229

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明六社・日本学士院と共存同衆・交詢社

——福沢諭吉・小幡篤次郎・馬場辰猪——

井上琢智

ご紹介いただきましたました関西学院大学の井上と申します。

この話を頂戴したとき少し躊躇しました。いちばん大きな理由は、私自身が福沢諭吉の経済思想そのものを取り上げた論文を一本も書いていないということです。福沢はもちろん日本経済思想史を研究する者にとつてはきわめて重要な人物であり、私たちの上の世代の先生方、たとえば杉山忠平先生とか杉原四郎先生などは福沢の経済思想についての論文や著書を書いておられますし、近年では藤原昭夫先生にも『福沢諭吉の日本経済論』（一九九八）があります。しかし、私は現在まで福沢の経済思想を直接扱った論文を書いていない、むしろ書いていないということです。というのは過去の蓄積が多く、広く、かつ深いものですから、なかなか論文を書くことができないでいるということです。

ただ、私自身は先程ご紹介になりましたように、日本とイギリスの近代交流史を、経済思想を軸として、この三十年來追ってきました。その中でとくに興味を抱いたのは、イギリスからのお雇い外国人、イギリスへの

留学生が、経済学の導入にいかになる役割を果たしたかということでした。従来の研究視点である邦訳史に加えて、この新たな視点をも加えた総合的な研究をしたということでした。

とりわけ、このような研究の基礎として、お雇い外国人、それに留学生の詳細な資料的研究をしなければなりません。研究を始めた頃は現在整備されつつあるデータ・ベースなどがなかった時代ですから、カードの一枚一枚に、一人ひとりの情報を書き、その人物がどこへ留学し、その証拠は伝記なのか、それとも、留学先の一次資料なのかをチェックしてきました。たとえば自伝や伝記に「ケンブリッジ大学留学」と書いてあったとしても、ケンブリッジ大学の学籍簿などによって裏付けられるかどうかを調査してきました。そのような作業の中で偶然、馬場辰猪にも出会いました。

このような資料につきましては、お手元にお配りしました資料の中の最後に【参考文献】がありますが、私自身がまとめました「幕末・明治・大正期イギリス日本人留学生資料」(一・二)をご覧頂きたいと思っています。かなり大部なものですけれども、未完了です。このような基礎資料の整備を行い、具体的にイギリス側の資料による裏付けがある人物を取り上げることが基本にしながら研究を進めてきました。もちろん実際にはイギリス側の資料的裏付けのないものも多くあります。

その作業中に気がつきましたのが、「日本学生会」の存在でした。これは、きょうのテーマになります「共存同衆」の母体となった組織です。この「日本学生会」と通常呼ばれている組織は、明治の初期にイギリスに留学していた留学生の仲間同士の討論の場としてつくられました。この日本学生会の調査を行っている時に、岩波書店の『馬場辰猪全集』の編集作業が行われており、その編集作業に、今日、来ていただいています竹田行之さんからお誘いをうけ参加させていただきました。これによって、私自身の研究動機がさらに強まったわけ

であります。

幕末・明治初期の日本人留学生が、「国」、「おらが国」の「国」、つまり「藩」を超えて日本という国家を意識しながら、イギリスの土地でいかに仲間をつくっていくか、そのような関心をもつて結成されたのがこの日本学生会であり、そのような組織から共存同衆は生まれてきました。研究の進展とともに、「共存同衆」それとかかわる「交詢社」に行き着きました。しかし、他方、これとは違うタイプの組織の存在にも気づきました。それが、当時の屈強の「ソサエチー」であった「明六社」であり、現在の「日本学士院」へと発展する組織でした。これらの二つの「ソサエチー」の内容とその相違を明らかにすることが今回の報告の第一のテーマです。もつとも、きょうは福沢諭吉の話をするということですので、副題には、福沢と馬場を取り上げて彼らの考え方の違いをこれら二つのソサエチーとの関連で取り上げたいと考えました。それが、お作り頂いたポスターに掲げられている副題でした。しかしこの報告のために少し調べを進めていくうちに、私自身まだ勉強してきていませんが、最近とくに研究が進んできた小幡篤次郎という人物を組み込む必要があると考えようになりました。つまり、二つのソサエチーに対するこの三人の考え方、役割の相違を明らかにすることは、明治初期の日本における近代社会の成立の研究にとって重要な課題ではないかという仮説を立て、それを論証したいと考え、その論証の一端をお話するのがきょうの話の最終的なテーマです。少し急ぎます。お配りしたレジユメには幾つかミスがあり、お詫びいたします。必要に応じて訂正をさせていただきます。お配りしたレジユメには幾つかミスがあり、お詫びいたします。必要に応じて訂正をさせていただきます。これからレジユメにはほぼ従いましてお話をさせていただきます。これからはほぼ従いましてお話をさせていただきます。

一 問題の所在

司会者からもおっしゃっていただきましたように、イギリス経済思想を専攻している私自身もついていた問題意識の一つは、イギリスにおける経済学のいわゆるプロの、すなわち専門家集団としての「学会」がいつできたのかということでした。経済思想史研究の用語で申しますと「いつ頃、経済学は制度化したか」ということです。たとえばA・スミスの『国富論』が一七七六年に書かれ、経済学は科学として成立しました。しかし、その経済学がケンブリッジ大学でトライボス——卒業試験のことですが——の一つに数えられたのが一九〇三年ですから、百二十年余りが経過しています。さらに「経済学部」として独立した「学部」となるにはさらに時間が必要でした。もつとも、R・マルサスは一八〇五年には経済学の教授職に就いてはいますが、それは例外です。このように考えますと、たとえば、イギリスの経済学会の設立は一八九〇年ですから、専門家集団としての学会の成立は経済学の場合、自然科学と比べてきわめて遅かったということになります。もつとも、それまで「ソサエター」がまったくなかったかという点、そうではありません。むしろ、アマチュア集団としての「ソサエター」はひじょうにたくさんつくられています。このように「ソサエター」の変遷過程を念頭に入れながら、馬場たちがかわった「ソサエター」について、次にお話したいと思います。

1 分析の視点

(1) 分析の視点としましては、今指摘しましたように、アマチュア集団としての同好会と、専門家集団言い換えればアカデミックな集団としての学会との関係に留意したいということです。このことは啓蒙主義時代

にあつては非常に重要なことです。つまり、アマチュア集団とアカデミック集団とをつなぐのが啓蒙思想家だと考えます。今日ではあまりにも専門化が進みすぎて、学会の中でしか理解されない専門用語が横行し、一般の市民にはその専門用語はまったく通じないといった問題点が深刻になってきています。一八七〇年代以降のイギリスでは、このアマチュア団体からアカデミック団体へと、その重点が少しずつ移っていくという状況があることを、まずは念頭においていただきたいと思います。まさにこの時代が日本の幕末・明治期にあたるということですから。

(2) もう一つは、「ソサエター」の議論を日本の状況で議論する際、アマチュアにせよ、アカデミックにせよ「ソサエター」が、政治団体化する可能性とその実態をどのように捉えるかという視点も同時にもちたいと思つています。

(3) さらに重要なことは、その中で「自発的(ボランティア)結社(ソサエター)」と「官製の結社(ソサエター)」——「官製の結社」ということばがあるのかどうかちよつと自信がないのですが——とを区別して考えるとき、政府の援助や政府に保護されながら設立され、維持された「官製の結社」をつくるという点をどのように評価すべきかということですが。

(4) この三番目の視点とかかわつて、その「ソサエター」が「ボランティア」なものかどうかということだけでなく、それが「開ざされたソサエター」なのか、それとも「開かれたソサエター」なのかを考えることがきわめて重要になると思ひます。この視点はこれから後でお話しますように、馬場がかかわつた「共存同衆」を理解する上できわめて重要なものだと思います。そしてこの「開かれたソサエター」というものを拡大することによつて、「近代社会」が成立していくと、馬場自身考えていたのではないかと考えています。論証には

さらに研究の深化が必要ですが、一応の一つの結論としています。

(5) このような視点に立って、「個」「ソサエター」が日本ではどのような形で区分され、理解されているかを考えたいと思っています。

このことは、イギリスの場合には政治的・経済史的背景から明らかですが、「個」「個人」が確立し、その「個」「個人」が少しづつ「ボランティア」な組織を形成し、その中から、政党にせよ学会にせよ、政治家や研究者といった専門家が自立した組織を結成していくという経路を見いだすことができます。しかし、近代化の遅れた日本の場合には、「個」の確立、さらにはその集団としての「ソサエター」もほぼ同時に成立させざるを得なかったのが一般的状況です。これをどのように考えるかということがあります。段階を追って一応整理をしますと以下の通りになろうと思います。

(a) 日本近代史の文脈の中では「家」から独立した「個(近代人)」の確立。

(b) 日本では「藩」が「国」と考えられ、さらに近代的な「国」という抽象的概念を近代の「日本」の確立という具体的内容へと、当時の人びとがどのようにして達することができたかを考えたいと思います。

(c) 私は経済学畑の人間ですから、ミクロ的な主体とマクロ的な主体という区別を考えたいのですが、(a)で扱う「個」から(b)で扱う「近代国家」を形成する際、重要かつ必須である中間概念として「共同体」を媒介にして「個」から「近代国家」をどのように作っていくかを、馬場辰猪を例として示したいと思います。

さらに、馬場の場合には、その「共同体」は旧い日本の共同体ではなく「結社」という「ボランティア」なものを媒介として、「近代国家」をつくっていくこうとする道筋を考えたのではないかということを明らかにしたいと思います。

2 分析対象

このような視点を踏まえながら、本報告で具体的に取り上げるのは、まず明六社とその明六社が解消される中で創立された日本学士会院であります。この二つの結社は、先程の区分で申しますと、比較的官製的なものであり、非常に「閉ざされたソサエチャー」でありました。それに対して、次に取り上げる共存同衆や交詢社は、さわめて第一のグループとは違った、つまり先程のことばで言いますと、まさに「ボランティア」で、そしてなおかつ「開かれたソサエチャー」であつたということです。

その点で東京大学（東京帝国大学）の学士会は、交詢社の設立状況をお話するなかで触れますが、同窓会組織の典型だと思えます。

3 比較対象（イギリス・アメリカ）

それではイギリスやアメリカでは具体的にどのような「ソサエチャー」があつたかを紹介したいと思います。渡航した際、日本人留学生はさまざまな「ソサエチャー」を見たり、場合によってはそれに参加さえしています。たとえば、福沢もいろいろな「ソサエチャー」を見ているわけですし、その内容は例えば山口一夫さんの『福沢諭吉の西洋航巡歴』（一九九二）をお読みいただければと思います。そこで今日のテーマに直接かかわりのあるものを取り上げていきたいと思います。最初に取り上げるのは、

(一) Royal Society (一六六〇)

ロイヤル・ソサエチャーがあります。これはI・ニュートンたちが活躍した科学革命の時代から始まる、いわゆる「学会」の連合組織として存在するものであります。それと同じ役割を果たしたのが、アメリカでは、National Academy of Scienceです。これらは専門家——もちろんニュートンの時代では、彼らは幅広い分野で

活躍していますから、今日のように細分化された各科学の専門家という基準から言えばアマチュアということになるのかもしれませんが――の集団で、やはり学会的な色彩の強い組織だといえます。

(2) The British Association for the Advancement of Science (一八三二～)

もう一つは、イギリスではこのロイヤル・ソサエティーそのものの衰退を背景にしながら、イギリス科学の進歩を促すためにこの組織が一八三一年に作られました。

(3) The National Association for the Promotion of Social Science (一八五七～八六)

そして最後に、これは今日のテーマにとってはとくに重要な組織であります。社会科学振興協会と一応訳しておきますけれども、一八五七年から始まって八六年に解散した組織です。この組織はもともと法律の改革をめざす組織から派生したものであり、マルクス主義的立場から見れば明らか革命的ではなく改良主義的な組織ですが、十八世紀後半から起こった産業革命を背景にして生まれたさまざまな社会問題を解決するための組織でした。

馬場が深くかかわった「ソサエティー」がロイヤル・ソサエティーやブリテイッシュ・アソシエーションといった純粹学会ではなくて、むしろ政治的な側面を強くもっていたこの社会科学振興協会であったことが、今日のテーマにとってきわめて重要な意味をもっているということです。

二 予備的考察

1 Voluntary Association (自発的結社) の定義

(1) ボランティア・アソシエーションは、今津孝次郎さんの「日本の Voluntary Association と明治前期民権結社——Voluntary Association と教育・序説——」(『京都大学教育学紀要』二〇、一九七二)の定義によりますと、特定の利害関心を共通にもつ人びとによって結成された機能団体だということです。ただし、会社、企業体は含めない。もちろん福沢を含めて当時の翻訳語としての「会社」と「社会」との区別の問題については、当然議論しなければいけないだろうとは思いますが。

(2) 同時にその、集団の設立、集団への参加・脱退が自発的でないといけないということです。とりわけ、参加そのものがクローズドではなくて、きわめてオープンである必要があるということです。

(3) 加えて、会員個人個人が互いに知り合うことが可能な規模だということです。

これが今津氏による定義ですが、これからの話はこの定義を念頭におきながら進めていきたいと思っています。

2 イギリス・アメリカの事例

先程、例に挙げましたロイヤル・ソサエティーは、イギリスの科学革命を支えたきわめて優れた学会でした。その会員が現代から見てもアマチュアであったとしても、その時代にあつては科学革命を実際に担えるだけの専門家でした。しかし、一八〇〇年代になりますと、バベッジ (C. Babbage)——彼は経済学者でもあり、コンピュータの原理を発明した人としても有名でありますけれども——彼が一八三〇年代に書いた *Reflections on the Decline of Science* によると、このロイヤル・ソサエティーはすでに死に体になっていたということです。つまり活動をまったくしていない。学会の *Transactions* はたえず発行されてはいますがけれども、実際に学会としての機能を十分には果たしていませんでした。

この衰退を背景に自然科学を中心とするイギリス科学促進協会が発足しました。それは一八三一年でした。この学会の目的は、科学の諸研究により強い推進力とより体系的な方向を与えることであり、科学の発展を阻止している障害を取り除くことであり、科学の研究者——当時、彼らは「cultivators」とか「philosopher」とよばれており、「scientist」ということばは一八四〇年代になって初めてヒューウエル (W. Whewell) という人が使ったとされています——を育てることでした。もともと、この科学は主として自然科学を意味します。といいますのは、当時は自然科学が学問の理想型だとされていきましたので、現在もそうかもしれません。自然科学の学会連合組織として創立されました。創立当初この組織には数学・物理学のA部会から統計学のF部会までありました。経済学はやつと一八五六年になってこのF部会に「経済科学・統計学」部会として含まれるようになりました。

まさに経済学がこのイギリス科学促進協会に組み込まれた翌年の一八五七年に社会科学振興協会が創立されました。経済学が自然科学化し始めたまさにその時期に、社会科学を中心とする組織ができたのです。その目的は、すでに指摘しましたように、イギリスが直面していた法改正、教育、公衆衛生、社会経済問題等——労働組合運動が主たる問題なのですが——取り組むことでした。その中にはいわゆる工場法や労資（労使）問題といった課題も含まれていました。したがってこの協会は、これら社会問題を経済学だけではなく、社会科学の発展と普及を通じて解決し、社会の改善に寄与することを目的としていた訳です。この組織は、ですから研究者だけでなく、当時を代表する政治家、さらには多くの女性を含む市民の参加を認め、この時代の立法に対する批判的立場にたった、政治団体ではないけれども、しかしながら強力な圧力団体となり、この時代の立法に非常に大きな影響をおよぼした団体でした。

注目すべきは、この協会にはさまざまなグループ、部会がつけられているということです。「立法・法改正部会」「教育部会」「公衆衛生部会」「社会経済（経済と貿易）部会」、そのほか臨時的に「刑罰・矯正部会」といった部会が作られ、個別の問題が議論されました。このようなテーマ別の部会をつくったということに注目しておきたいと思います。というのは、このようなテーマ別の部会組織が、共存同衆や、そのあとの交詢社でも、分野は多少違いますけれども、実際に設置され、そこでは専門家がテーマ別に議論をすることになっていったということです。この一つを見ても、馬場をはじめとするこの社会科学促進協会に参加した多くの日本人が、そこでの経験を日本で展開しようとしたということが分かります。これが、先取った結論の一つです。

三 具体的分析

今日取り上げております明六社や共存同衆といった組織は、それを立ち上げるに際してイギリスやアメリカのどのような組織をモデルにしたかを簡単にお話しておきたいと思えます。

1 明六社

(1) 設立

ご承知のように、明六社は明治六年に森有礼がアメリカから帰国後提案したものとされています。

(2) 目的

その目的は、あくまでも「米国にては学者は各其学ぶ所に従ひ、学社を起して互に學術を研究し、且講談を為して世人を益す」ということです。前段は専門家としての研究、後段はたしかに啓蒙的な側面をもっています。

す。このようなアメリカでの現状と比較して、日本ではいわゆる「学会」が実現されていない現状を指摘し、「余は本邦の学者も、彼国の学者の如く互に学社を結び、集会講究せんことを望む」と書いています。

(3) モデル

この森自身の発想はだから来たかというところ、森のアメリカ時代にまさに彼の父親、保護者の役割を果たしていたヘンリー (J. Henry) からだろうと思います。ヘンリー自身は、Smithsonian Institution それから American Association for the Advancement of Science 先程申しました自然科学を中心とする学会の会長をしています。さらには、National Academy of Science の会長をも務めています。これらを踏まえたと、森は学者の集団をまずは大切に、その中で得られた成果を一般の国民に提供するという、そういう目的意識をもっていたのだと思います。

(4) 組織

したがって、そのような組織は、あくまでもクローズドなものになっていきます。その前にその組織を簡単に触れたいと思います。

(a) 二つの仕組みがあり、一つが図書館で、もう一つが学・術・文をする社中です。注目すべきは、この図書館はだれが入館してもいいとされていることです。しかし、

(b) この社中への「入社ヲノゾム人ハ……入札シ可トスル者五分三ニ至レハ之ヲ許スベシ」とあり、初めから、この会はまさにクローズドなソサエティーとして考えられています。さらに付言すれば、社中のメンバーとしては、研究者の集団がまず念頭におかれていたということです。この規則については後にも触れますが、入会の条件が少しずつ厳しくなって、最後には三分の二になります。まさにこの閉鎖性が一段と強めら

れるということですが、加えて、

(c) この会は政治的中立性を宣言しながらも

(d) 当初あった「我国ノ教育ヲ進メンカ為」という目的が削除されるなど、啓蒙的側面を——これだけの材料で判断するのは危険かもしれませんが——弱めていきます。それは、例えば当初「異見」とあった文言を「意見」と変更したことにのみ現れているのではないかと思えます。

(5) 特徴

このようにしていいよこの明六社が、啓蒙団体としての性格を失いはしなけれども、どんどんと弱め、狭い意味での学者の集団となることを目的とするようになっていったと言えると思えます。

(6) 衰退経緯

『明六雑誌』の廃刊問題——雑誌そのものは啓蒙するための最も重要な手段でありますが——を契機として、この明六社はその存続の議論に拍車がかかります。刊行の継続をめぐる、廃刊を提案した福沢、それに対する賛同者は津田仙、箕作秋坪などです。それに対して存続を主張したのは、西周や津田真道などです。この対立を見ていきますと、やはり福沢のこの会に対する姿勢がどこにあったかを想像できます。この対立が決定的になったのは、「東京学士会院」設立問題です。

2 東京学士会院

(1) 設立と変遷

この設立は、その後の経緯から見ただけでもわかりますように、「帝国学士院」になっていくことから明らかのように、さわめて学会のトップの人びとによって組織されました。当初は、博士号授与を推薦できる

権限をもっていました。

(2) 目的

重要なことは、この会が「学者は各其学を学ぶ所に従い、学社を起こして以て互に學術を研究」することが中心だったということです。もちろん「講演を為て世人を益する」とは書かれています。この点は日本の学制をたどるとよく分かります。たとえば、帝国大学は研究を中心とする組織であり、大学で教育を行うことが通達されたのは第二次大戦中です。この点は今日もなお旧国立大学においては残っていると思います。ですから、昨今の大学改革では「教育、教育」と言わざるを得ないのではないかと思います。その帝国大学のトップにあるのがこの組織ですから、やはり「研究」中心だということです。

このような組織の最初の選挙で、福沢は院長に選ばれています。これが次の話題になります。

(3) モデル

それではこのような学者集団の組織そのものが、イギリス型・アメリカ型なのか、フランス型なのか問題になります。すなわち、イギリスはきわめて個人主義がほかの国に比べれば確立している国でしたから、イギリス型は基本的に「会費による自立的な会」なのです。当初、日本学士会院はそのような性格をもってはいましました。しかし、それに対して森自身が文部大臣になった際に、この学士会院の改正案を提出しました。その変更は学士会院をイギリス型からフランス型へと変更しようとするものでした。つまり、この組織を「国家に保護された、いわゆる官僚機構の一部」として変更することでした。

(4) 組織

この問題は、福沢の会長辞任の問題と深くかかわっていると考えます。この組織が会員数四十名のきわめて

閉ざされた会員制の組織であつて、ある意味では一般国民とは隔離されてるといふ側面をもつていて、この点なのですね。もちろん研究成果を一般の国民にも伝えるという役割が完全になくなったわけではありませんが。

(5) 福沢・小幡退院問題

それでは、福沢会長辞任問題さらには福沢・小幡の退院問題の内容を見てみたいと思います。その経緯は『交詢社百年史』(一九八三)や『日本学士院八十年史』(一九六一―六三)に書かれています。交詢社史では簡単に福沢の改革案が受け入れられず、福沢が多忙であつたためと書かれてはいますが、その中身を今少し詳しく見ていきたいと思います。

福沢が問題にしたのは会員の「給与の二重払い」ということでした。すなわち会員になると給与と年金が出る。もちろん本来の職場でも給与をもらっているのですから、その上に日本学士会院からも給与をもらう。それは「給与の二重払い」であつて、「とんでもない」ということですね。ましてや年金まで支払われていくということになれば、好ましくない。そこで福沢は「年金を積立てて学士会院を自主運営」という改革案を出したんですね。ところがこの改革案は、中村正直が賛成しただけで、全体の賛成は得られませんでした。そこで小幡は、議論の中で改良の実施を暫時的にしようとして提案したのですが、それでも最終的には福沢の提案を実現することになるといふものでしたから、やはり受け入れられなかった。ですから福沢は辞表を出します。この福沢の改革の意図はどこにあったのでしょうか。学士会院という「ソサエター」は一人ひとりの自主的な「ボランティア」な集まりであり、オープンな組織であることを福沢は強く望んでいたのではないかと思います。自らの会費でもつて、自らの組織を自立させる。そういうことを彼自身は考えていたのでは

ないかということです。改革案が受け入れられなかったため、彼自身は除名願いを出します。もともとこの「除名願い」ということばが、「除名してくれ」の意味なのか、「自主退会」の意味なのか、厳密には考えないといけないと思いますが、いずれにせよわざわざ「除名してください」と言うわけですから、ちよつと穏やかならぬ辞め方だろうと思います。

いずれにせよこのような「閉ざされた、官製的な政府の官僚機関」の一つとして存在するようになった組織、「ソサエチー」に対して福沢は、「ポランタリー」な組織であることを目指していたということになります。

ちなみに日本でも「専門学会」がその当時少しずつできてきています。たとえば、「スタチスチック社」(一八七六)、その後の「統計協会」で、適塾出身の杉亨二が創立者です。また、「日本数学会社」(一八七七)が神田孝平等によってつくられます。また、「(東京)化学学会」(一八七八)ができ、「東京地理学会」(一八七九)、「日本地震学会」(一八八〇)などが次々と創立されていきます。これらは、ロイヤル・ソサエチーのような学会の連合体ではなくて、個別科学の個別学会が日本にも次々と誕生してくるようになっていくということです。

たとえば、「化学学会」でいいますと、イギリスでは一八四一年、フランスでは一八五七年、ドイツでは一八六八年、ロシアで一八六八年、アメリカで一八七六年で、日本が一八七八年ですから、アメリカとそれほど変わらないんですね。ということはすでにこの当時の日本の化学研究がいかに優れたものになっていたかということになります。その当時、イギリスに留学した代表的な人物は杉浦重剛です。杉浦重剛は貢進生として東大で学び、それからロンドンへ、最終的にはマンチェスターのオーエンズ・カレッジで化学を学びます。その後この大学には日本人化学者が留学し、日本の化学界を担っていきます。もともと杉浦重剛は途中で化学を捨

てますけれども、イギリスの時代に学生として英文の専門論文を書いて、それがイギリスの専門の学会誌に載せられるほど優れた研究成果を上げています。もつともこのような専門学会は馬場や福沢の直接の関心ではありませんでした。

3 共存同衆

それでは共存同衆はどのようにつくられていったかを追っていききたいと思います。

(1) 社会科学振興協会と日本学生会

共存同衆は先程申しましたように、日本学生会がその発端となっています。このことは先程簡単に触れましたが、思い出していただきたいのは、この日本学生会は馬場辰猪が中心となつてつくられ、相談にあずかった一人がロンドンに滞在中であつた小野梓であつたということです。

もう一つ確認しておきたいのは、共存同衆のモデルになつたのが社会科学振興協会であつたということです。この組織は、先程申しましたように、社会改良をめざす、政治団体ではないけれども、市民の運動団体でした。この組織はほんの短い期間しか活動しませんでした。活動中は全国大会を年に一度イギリス各地の大都市で開催しています。そこへは会費を払つて多くの市民が参加し、会場となつた都市はこの全国大会を市民の一大イベントと位置づけ、補助金まで出しますし、地元の新聞はその全記録を掲載します。

それと同時にロンドンで分会といえますか、常会と訳してもいいかもしれませんが、そういう小さなグループの会合を開催し、研究会を開いています。一八七二年の十二月二日の社会科学振興協会の記録によると、日本人が最初に出席しています。一八七九年の三月十日までの記録を調査しますと、約十名の日本人が延べ三十回にわたつて出席しています。その会合への出席は一八七三年に集中しています。馬場が十二回、原六郎、彼

は日本学生会会員で、帰国後銀行関係で大きな役割を果たし、共存同衆の設立についても協力しますけれども、この原が八回。それから長岡護美が二回、馬場の同郷の真辺戒作らが出席しています。十二回にわたってこの会に出ていた馬場が、その経験をもとに一八七三年にノリッジで開かれた同協会の全国大会にも出席しています。

そのうえでもう一つ申し上げたいのは、この協会は、当時のイギリスでも唯一例外だと思うのですが、履歴書の提出などの手続きは必要なのですが女性の参加を認め、最初から副会長に女性を選ぶなど、女性の自由な参加を認めました。そして、女性雇用などさまざまな女性問題をテーマとして取り上げ、また特別の会合を開いて討論しています。会員の中には非常に有名な女性がいます。「イギリス社会科学振興協会とヴィクトリア中期の女性問題」(『大阪女学院短期大学紀要』第一八号、一九八七)に詳細を紹介していますが、たとえば、いちばん良い例はナイチンゲールだと思います。その他、ナイチンゲールほど有名ではありませんが、たとえば、ポーチュレットとか、メレデイス、ベイーンズがいます。その中で重要な人物がいます。H・マーティノーという女性ジャーナリストであり、経済学入門書の書き手であり、社会改良主義者がいます。そのノリッジでの大会で馬場はこのマーティノーと会っています。当時のイギリスでも希有であった女性の参加を認めていたこの協会に参加することで、馬場は女性問題に関心を抱き、後に共存同衆の会合で「本邦女子ノ有り様」(一八七五年三月)というタイトルで演説していますし、その講演をイギリスに戻ったときに「日本の状況・日本の女子教育」(一八七五年六月)として日本学生会で演説しています。この馬場の意図した日本学生会の目的は「言論の自由」の重要性を自覚し、実践し、体験し、日本で共存同衆を結成し、日本国内における言論の自由の場を形成し、最終的には、社会科学振興協会がイギリス社会の改良をめざしたのと同様に、日本の社会の改

良を改革するという意図があったのではないか」ということです。

(2) 共存同衆の歴史

共存同衆は、一八七四年九月に結成され、翌七五年に『共存雑誌』を刊行、七七年に共存会館建設と順調に発展しましたが、八〇年の集会条例の発布により打撃を受け、その年うちに『共存雑誌』が廃刊されるなど急速に衰退します。その後、組織そのものは大正時代まで続きますが、重要な活動は馬場辰猪のアメリカ行き(一八八六)とともに、実質的には消滅してしまします。

(3) 特徴

次に社則などを検討することで、共存同衆の特徴を簡単に見ていききたいと思います。

まず、会合への出席ですが、希望者は開会前にただ単に「私は出席します」と申し出るだけで、自由に参加できますし、イギリス社会科学振興協会と同様、女性衆員の参加も認めます。男女も含めて「種々の人種」の共存を実現することを目的としています。

さらに、その衆員全員が「我々も我が自由思想を以て相許して定置たるべし」唯一の「無形の統御者」であるべきだと考えています。したがって、各衆員は「権利を求め、義務を責め」る必要があるとされています。このような組織ですから当然、組織の「頭」として「社長」、「会長」を置いていません。もつとも会議の議長は必要ですから、「会頭」と呼んでその役目を担うことになっていました。

小野は、このことについて「世の社会」と同様「頭取・酋長なる者」を仰ぐ明六社を「ソサエチー」の「先鞭」とは認めなかったと言っています。つまりこれは明らかに明六社を共存同衆に対抗する組織として考えていたということだと思えます。ですから、非常にクローズドで、そして官僚機構の一部となりつつあった明六

社を、小野は批判をしていたことになりました。

このことは現代でも重要なことだと思えます。たとえば日本で戦後創立された学会の中で、私が所属している経済学史学会はその代表者を「会長」とは呼ばずに、運営主体である幹事会のまとめ役として「代表幹事」と呼んで、「会長」という名称を避けてきました。つまり、会員は全員基本的に平等だという立場を維持しようとしていました。

さらに共存同衆は「不偏不党」を掲げますが、社会改革の担い手となるという意味で、政治的圧力団体になることが望まれていました。

このような特徴を共存同衆はもっていたわけです。しかし、さらに重要なことは「権利を求め、義務を責め」る衆員全員が、組織の「頭」として「社長」、「会長」を仰がず、「我が自由思想を以て相許して定置たるべし」唯一の「無形の統御者」となるような結社そのものが、「一般の『社会』へ観」にまで広げられるときに、まさに「その総体が」近代市民社会としての民主国家となる」一つの契機となるというが馬場の意図だったということです。

実際にこれらのメンバーは、儒教や漢学の影響を受けていた明六社とは異なり、英学の影響を強く受けていた人びとでした。したがって当時の人びとはこの共存同衆に集う人びとのことを「英学書生の集合なり」と言っています。そのかぎりではまさに若い時代に英学を学ぶことによって「どこまで本質的に理解したかどうかは別にして」民主的なルールをマスターしていきつつあった人びとの集団であったということ、そのことがまさに「共存同衆」というその名前にも現れていたということだろうと思えます。

4 交詢社

このような共存同衆の衰退の流れの中で、交詢社が登場します。明六社、東京学士会院、日本学生会、共存同衆、交詢社の盛衰の流れを見てみたいと思います。まず最初に明六社が設立されます。その明六社ができた年である一八七三年の九月頃に日本学生会が結成されています。『明六雑誌』の発刊が続く中で、新たに共存同衆が一八七四年九月に結成されていきます。小野梓の見解によれば、組織上も特徴も異なった「ソサエチー」が併存する中で、次第に専門の学会ができていきます。

馬場はイギリスと日本との間を行き来します。馬場の影響力が大きかった共存同衆の盛衰は彼の渡航・帰国に左右されます。明六社を結果的に消滅させることになった東京学士会院の設立が一八七九年です。この時点では明六社には「明六会」と名前を変更していて、以前の明六社とは異なった組織になっています。このような状況の中一八七九年七月三十一日に、福沢は「社中集会の義につき会合を催す」との連絡を仲間に送ります。休刊していた『共存雑誌』はその年の三月には復刊しています。馬場が前年の五月に帰国しており、小野など旧友訪ね、共存同衆の再出発のための努力をした結果でした。このように東京学士会院の創立と共存同衆の復活の流れの中で交詢社は立ち上がっています。このような経緯を念頭においていただきたいと思います。

(一) 設立動機——福沢の西洋航巡歴——

すでに紹介しました山口一夫さんの「福沢諭吉と倶楽部」(『泉』第三九号、一九八二)や『福沢諭吉の西洋航巡歴』で詳しく述べられていますので、紹介は避けますけれども、交詢社の設立には福沢の海外での経験、とりわけロンドンでの「コンサーバティブ・クラブ」、アムステルダムでの「ヨット・クラブ」などの経験が大きく影響していると思います。

(2) 目的

「慶應義塾社中集会の趣意書」の中に、慶應義塾そのものの目的が書かれていますので紹介します。「慶應義塾の本色は天下の後進性を学問上に教育するものなれども、其到底の目的は社会の風俗を改良して人生に大切な居家処世の道を安からしめんとするにあり」（『全集』第一九卷、四〇一頁）とあります。つまり慶應義塾の目的が、第一に教育を、第二に教育を通じて「社会の風俗の改良」、個人に対しては「居家処世の道」を確保することに求められています。このような慶應義塾の「社中」つまり「ボランティア」な組織の中から交詢社がつくられていきます。

交詢社の設立準備のために、一八七九年八月四日に最初の会合が開かれますが、その後の議論の中で少しずつ交詢社の姿が明確になっていきます。たとえば、最初「社中の集会」にすぎなかったものが、「社中の結社」つまり「同窓会」としての性格を持つようになっていきます。しかし、最終的には「一学塾の卒業生だけが集まって社を結ぶという閉ざされたものではなくて、広く門戸を開放して、当時の日本の知識階級の知識交換の場、一種の社会教育の機関たらしめようとの考えに発展」していきます。

これを裏書きすると思われる重要な資料を指摘しておきたいと思えます。『交詢社百年史』によれば、「交詢社社則」（西村本第二）に、「交詢」社という名称を確定するまでに「日東」社という名称が考えられていたということを示す資料がありますが、この資料に注目したいと思えます。というのは、元来「日東」と印刷されていた所に「交詢」と書かれた紙を貼っているということですが、「日東」ということばは「日本」のことを意味しますから、交詢社はもととも「日本社会の社則」——その「日本」が日本の社会全体を指すのかどうかは不明ですが——を作ろうと意図していたとも考えられる訳です。穿った見方かもしれませんが、しかし、少なく

とも言えることは、たとえば先程申しましたようにイギリスの社会科学振興協会の名称には「ナショナル」ということばがついていますが、その「ナショナル」はもちろん広い意味のイギリスを指すのですが、それを意図してわざわざ「日東」「日本」とつけたのかもしれませんが。具体的な実証をしなげらばならない問題だとは思いますが、注目しておきたいと思います。しかし、いずれにせよ「日本」を意味する「日東」というと名称を付けようとしていたということは、この交詢社が日本の近代社会の形成のまさに核になるという気概を示すものですし、その気概は今なお慶應義塾に生きていると思います。

それでは、このような社則の起案にどのような人物がかかわったのでしょうか。第一回の創立準備会には、小幡篤次郎、小泉信吉、馬場辰猪等がいます。この社則の作成過程で大きな影響力を示したのが、結論を先取りして言えば、馬場辰猪ではなかったかということです。

(3) 社則

社則の中に以下の文章があります。コメントを付けながらお話をしたいと思います。

まず、「社会旧来の仕組を一変して人々独立精神は稍や成長したる如くなれども」という文章です。ここで重要なことは、個々の人びとの独立の精神がまずは少し成長してきた、という現状認識です。

さらに「人間第一の緊要たる社会結合の一事に至ては、未だ其体を成さず。藩名に依て社を結ばんとするも既に其藩なし。県名に依らんとするも其県甚だ新にして未だ之に慣れず。生国の国名に依らんとするも漠然として広きに過ぎ―これは日本ということだろうと思いますが―、同郷竹馬の友を会せんとするも狭きに過ぎて事を謀るに足りず」とあります。ここには、個人の独立精神が育ってきたにもかかわらず廢藩置県によって失った「おらが国」はなく、しかし、新しい社会、すなわち「日本国」は広すぎ、一方「同郷」では狭すぎ

るとして求めるべき「社」や「会」の単位を模索しています。そして最後に、「人類結合の堅固なるは生誕の土地——「同郷」です——に依るに非ず、職業の異同に——「身分」です——依るに非ず、唯同一の主義〈principle〉に従て意見を同うする」社会を求めていきます。ここで言われている「主義」という用語は、「ism」を訳したものと今日では通常使われています。たとえば、社会主義、socialism、です。しかし明治期はもともこの「principle」を「主義」と訳してきました。たとえば、関西学院はキリスト教主義に基づく学校ですが、その英文の創立文書には「on the principles of Christianity」となっています。「Christianity」の「principles」と複数になっているので、キリスト教であれば、ちよつとカトリックは別かもしれませんが、プロテスタントであればどの派でも寛容できるということを言っています。

しかし「主義〈principle〉に従て意見を同うする」社会を求めながらも、「一科一事、専門の結社よりも先ず人間第一緊要たる社会結合の旨を達するが為云々」とあるように、専門学会よりも「社会結合の一主義」を実現し、その後専門学会を実現すべきだというのが、この社則の意味するところだと思ひます。

このように考えますと、次のように要約できるのではないかと思ひます。

まず「人間の独立精神」は「稍や成長」しており、専門学会である「一科一事、専門の結社」は存在しているものの、しかし「人間第一の緊要」が欠如しているとの認識に立つて、まさに近代社会の形成のために必要とする「社会結合」の原理、たとえば、A・スミスであれば「同感の理論」、ルソーであれば「社会契約論」といった「社会結合」の原理そのものがやはり日本にはいまだ欠如している。だからこそそのような原理を求めることがこの交詢社の少なくともその最も初期の「社則」に現れた思想だろうと思ひます。

それではこの問題をどのように解決をするかということになります。まず「一社」を結ぶ、共存同衆かもし

れませんし、交詢社であったかもしれせん。しかし、いずれにせよこのような「社」が他の「社」と結合して複数になる、そしてその連鎖が「近代社会」を形成すると考えたのではないか。これがこの社則の趣旨ではないかというのが私の結論であります。この理解が正しいとすると、あとでお話します馬場辰猪の考え方ときわめて密接なかかわりがあるように思います。

それではこの「社則」の作成に参加した人びとの果たした役割を考えてみたいと思います。『交詢社百年史』には、この点について福沢の見解を以下のように書いています。

「福沢の発想が、はじめは慶應義塾の同窓会というところにあつた」(三五頁)。その根拠として挙げられているのが、勧誘した対象が義塾の社中であつたこと、また、福沢の個人的な知り合いに限られていたこと、さらに東京などのさまざまな新聞を使って勧誘したことなどです。しかし、この福沢の発想が同窓会設立にあつたということはたして本当なんでしょうかという一つの問題があります。現在では、交詢社は同窓会とは一応切り離されていますが、この証拠だけで交詢社が同窓会として結成されたとするには問題があるようには思いません。

もっとも、交詢社設立時の状況を調べてみますと、一八七七年から七八年にかけての時期に、慶應義塾はかなり経済的危機に陥っています。そこで政府も含めさまざまな関係者に資金援助を求めています。この経済的危機の問題と交詢社設立とを結びつけて考えますと、交詢社を慶應義塾を支える同窓会組織として設立しようとしたという判断も間違っているとは思いません。

(4) 組織

残りの説明は簡単にしたいと思います。組織は二十四名の公選された常議員で、任期二年で半減上陸で選ば

れます。常議員長・副長は選挙——もちろん無記名投票の実施が規定されていますが——で選ばれることになっています。入会は、これは重要なことですが、社員二名の推薦とともに入会を申し込めば可能になるという点です。常議員の「衆議」の上での許可にすぎませんから、事実上申し込みをさえすれば、よほどのことがないかぎり許可されたのだろうと思います。もちろんオリジナル・メンバーには推薦人もいりません。会費は有料でした。その意味ではこの会がボランティアな、つまり経済的自立を原則とする組織であつたということでした。

大会は東京で開くと同時に、小会も開いていたということがあります。先程の社会科学振興協会は、もちろん全国を回っていきますけれども、ロンドンでも開催されてきました。そこに馬場などが出席していたことはすでにお話しました。さらに、東京にとどまらずに各地に「支社」を置き、「親睦会」を作つていきます。それだけではなくて、巡回の委員をつくり、その委員が日本中を講演することになっていました。このような地方への拡大は、交詢社が日本中にその組織を伸ばそうとしていたことを意味していると思います。

会合では「弁論ハ自由タリ」として言論の自由を保障しています。とはいえ当時の言論統制を無視できるはずはなく、あくまでその言論の自由も「不敬ノ言語ヲ用ヒナイ」限りということになっています。

さらにもう一つ重要なことは、部会を設置していることです。この部会は「農部会」、「経済部」、「法律部」そして「工芸部」です。第一部会のメンバーには、鳴門義民、井関清などが、第二部会には犬養毅、高島小治などが、第四部会には浜野定四郎、中村貞吉、辰野金吾、小幡篤次郎らがいます。このような部会組織は——社会科学振興協会には農業、工芸はありませんが、経済の部も法律の部も実際に存在していました——日本のその当時の状況、まさに工業化を行い、農業改革を行うために必要な部会であつたということだと思います。

このように、この交詢社は、共存同衆と同じように、イギリスの社会科学振興協会ときわめて類似しているということでもあります。

(5) 常議員

それでは常議員メンバー(第一回、一八八〇年)を見ていきたいと思います。会頭、これは議長ですけれども、長岡護美で、日本学生会のメンバーでもあった人物です。これらのメンバー全員の分析そのものは、もういまは時間ありませんので出来ませんが、詳しくは「明六社と共存同衆」(『近代化の諸相——産業経済とその周辺』一九九二)をご覧くださいだと思います。この常議員の中に馬場辰猪がもちろんいます。この選挙では三六九票を取っている。常議員のトップは福沢諭吉で九六四票であり、小幡篤次郎が二位で九一九票です。それから菊池大麓(三九二票)です。彼は東大教授ですが、ユニヴァーシティー・カレッジからケンブリッジ大学へいって、ケンブリッジで日本人最初の学位を取った数学者でした。この菊池も日本学生会のメンバーでもありますから、日本学生会、共存同衆のメンバーとの重なりが多く見られます。他に、岩崎小二郎も日本学生会のメンバーでもありました。

(6) 特徴

交詢社の性格付けについては諸説があります。たとえば、交詢社は「同窓会」であるという理解、「知識を交換し云々：最古の社交クラブ」であるという理解などです。もともと「社交クラブ」という意味をどのようにかえるかということは問題がありますが、いずれにせよ、今日でも社交クラブとしての役割を果たしていると言えます。ところで、「現在でも交詢社には女性メンバーは入っていませんか」とお尋ねしますと、「ジェントルマンの倶楽部なので女性は入っていない」ということでした。この点では社会科学振興協会の精神は受け継

いでおられないという気はします。

もう一つ、山口一夫さんによれば、交詢社は「啓蒙思想家としての諭吉が独自の見識に基づいて創設した独特の組織」というふうに書かれています。このことに異を唱えるつもりはありませんが、私はやはり先程申しましたように、創立初期の考え方からして、社会科学振興協会や交詢社の露払いをした共存同衆が大きな影響を与えたのではないかと思っています。それも馬場を通じてその影響が大きかったのではないかと思っています。

馬場だけではなく、先程申しました日本学生会に、そして共存同衆に属していたメンバーによって、この組織はただだんに「社交クラブ」としてではなくて、また「啓蒙団体」としてだけでなく、もっといえば「同窓会」としてでもなくて、まさに馬場が求めていた政治組織を指向する団体としての側面をもっていたのではないかと思っています。しかし、実際に「同窓会」として、そして「啓蒙団体」として、「社交クラブ」としての役割がなかった訳ではありません。少なくとも福沢は交詢社が政治組織ではないと何度も公言していますし、その意図もないと何度も明言をします。このような文脈で考えますと、交詢社が政治組織体への変貌を求める馬場と、そうでない福沢との間でこの交詢社に求めたものが異なっていた——当初は同じであったとしても——ということになるかもしれません。もともと、福沢、小幡、そして馬場との間で、交詢社はボランティアな組織である必要があることについては共通認識があったと言えると思います。三人の思想家の交詢社への姿勢の違いに注目したいと思います。その前に、「同窓会」組織について、多少言及しておきたいと思っています。

5 学士会

それでは同窓会の一例として「学士会」という東大の同窓会を取り上げたいと思います。詳しくは、『学会百年史』（一九九二）をご覧ください。一八八六年に創立されたこの組織はきわめてクロウズドなソサエチー

です。学士号を有したもののしか参加できないのですから。さらに言えば、東京大学・東京帝国大学京都帝国大学が生まれるまでは日本で唯一学士号を出せた学校ですから。しかし、注目すべきは、この「組織」が「会長を置かず、入会についても強制的でなかった」ということです。これは少し現在の大学の同窓会とは異なると思います。関西学院大学もそうなのですが、入学したときから同窓会の会費を少しずつ支払い、よほどのことがないかぎり同窓会に強制的に加入をさせられています。その善し悪しは別にして、現在の同窓会の方が強制的で、会長もいますから、封建的なのかもしれませんね。

さて、結論をお話ししなければなりません。要点は、福沢と小幡と馬場がこの交詢社をどのように考えていたかということであり、その相違はそれぞれの思想とどのようにかかわっているかということを明らかにしたいということです。小幡については、今回のこの講演のために竹田行之さんから送っていただいたさまざまに資料を利用していただきながらお話ししたいと思います。とりわけ、きょうお越しになっていると思いますが、住田孝太郎さんの「小幡篤次郎の思想像―同時代評価を手がかりに―」（『近代日本研究』特集・小幡篤次郎没後百年」第21号）、二〇〇四）などを利用していただきました。感謝申し上げます。

四 福沢・小幡・馬場の思想と役割分担

1 福沢諭吉

(1) 福沢が「社会」と「個人」をどのように考えたかという根本的な問題に遡って議論をしていきたいと思います。この議論には柳文章さんの『翻訳語成立事情』（一九八二）を参考にさせていただきます。society、

や 'individual' を邦訳する際の問題点に関しては、いろんな研究がありますが、その中でこの柳父さんのものを、とくに福沢の事例を理解する上では有益なものだと考えていますので、その内容をご紹介をしながら、考えていきたいと思っています。

(ア) OED による 'society' の意味

OED によれば 'society' の意味は、

①「仲間の人びととの結びつき、とくに友人同士、親しみのこもった睦みつき、仲間同士の集まり」とあります。ところがこの①のきわめて具体的な定義に対して、②「同じ種類のものどうしの結びつき、集り、実際における生活状態、または生活条件。調和のとれた共存という目的や、互いの利益、防衛などのため、個人の集合体を用いている生活の組織、やり方」。これは OED にある説明についての柳父さんの訳なんです(ア)とあります。

(イ) しかしいずれにせよ日本の翻訳の歴史を見たときに、その 'society' の訳は基本的に、たとえば、例としては(仲間、組、連中、社中)とかあって、まさに①の意味とほぼ等しいものです。そしてたしかにその中で『国』や『藩』があつて、人々は身分として存在しているけれども、個人としてではない」という当時の事実を考えたときに、この 'individual' ということばとの関係で考えますと、この①の内容が示すものではなく、②で示される抽象的な意味における 'society' を意味する実体が当時の日本にはなかったし、それを示す日本語も存在しなかったと考えられます。

(2) 福沢における「社会」の意味

ところが、福沢は①だけでなく②で示される考え方をもっていたということ。『西洋事情』等にその考

え方を見て取ることができません。

私自身の使った資料が、間接引用であったり、古い『全集』であったり、最近の『選集』であったり、まちまちで申し訳ありません。原典に戻る時間がなかったためです。

(ア)『西洋事情 初編』

『西洋事情 初編』では、「イギリス人が政府の力をたよらず、民間人の手によって商業的結社を結成したり、学校や病院等を経営する点に異常なほどの関心を示している」(『交詢社百年史』四頁)と書いています。すなわち、イギリスにおける個人主義の尊重に福沢が注目していたということです。

(イ)『西洋事情 外編』

‘society’の訳語として「人間交際」が多用されています。他に「交際」・「交」・「国」・「世人」とも訳されています。この「人間交際」という訳語は現在でも違和感がありますけれども、当時ではもつと違和感があつたと思われます。むしろ福沢は「人間交際」という「当時の日本語としてはやや抵抗のある語感」をもつた言葉である。「交際」によって、先程の OED の定義による②で示された抽象的な概念を作ろうとしているということです。これが柳父さんの考えです。

(ウ)『学問のすゝめ』

(ここには「学問と云ひ工業と云ひ政治と云ひ法律と云ふも、皆人間交際のためにするもの」(『全集』第三巻、八七頁)であるとか、「事物の相談に伝聞文通にて整はざるものも直談にて円く治まることにあり。…情実互に相通じて羨望嫉妬の念は忽ち消散せざる得ず」(同一一四頁)などさまざまな引用から、柳父は以下のような結論を引き出しています。

福沢は「ことば使いの構成の工夫を通じて、意味の矛盾を引き出し、その矛盾によって新しい意味を造りだしていく。それは、単にことばの上だけの工夫ではなく、現実生きていく意味の重みを負ったことがらを操作し、組み立てていく。その彼方に、*society* にも匹敵するような『交際』意味の展望を切り開こう」としたというのです。

その点ではある種の造語を意図していたということですが、ことばは新しくないけれども、造語ではないけれども、意味の転換を意図したということですが、こういうことはしばしばあります。経済思想史の分野でもこのような事例はあります。たとえば、A・スミスが、*sympathy* ということばを使いましたが、この言葉はスミス以前とスミスとの間では意味、内容がずいぶん変わってきたということがいわれます。古くは「同情」を意味し、スミスは「共感」・「同感」の意味をもたせようとしたということです。

つまり、すんなりと理解されるようなことばを使うのではなく、少し違和感のあることばを使って、そのことばの意味や概念を定着させようとした。抽象的な「社会」という概念をまさに引き出し、定着させようとした。柳父さんはこのように解釈されています。

(3) 福沢における「個人」の意味

この点では、*individual* についても同じだと柳父さんは指摘します。重要なことは、たとえば、西村茂樹が『明六雑誌』(一八七五)掲載の「西語十二解」という文章の中で、*society* を「仲間の交際」と訳す一方、*individual* を「一身ノ身持ち」と訳しています。このように「一身ノ身持ち」という日本語としては不思議な言い回しをしています。時には「一箇人民」とも訳しています。それは西村にとって *individual* という語が *man*、*humanbeing* とは異なった語感を感じ取ったために「人」とは訳せなかったというのです。

それでは福沢はどうであつたのでしょうか。福沢は「人の一身は他と相離れて一個の全体を成し、自ら其身を御し自らその心力を用ひ、天に対して其責に任ず可きものなり。故に、人 (individual) 各々身体あり」といつていますが、この文章で示された「人」とは、いわゆる「天は人に上に人を造らず人の下に人を造らず」という、まさに「天」と対比された「人」なんです。その意味ではキリスト教と福沢との関係は注目すべきだと思ひます。最近、白井堯子さんの『福沢諭吉と宣教師たち―知られざる明治期の日英関係―』(一九九九)が出版され、私も興味深く読ませていただきました。このようなキリスト教の文脈の中で「人」を理解している。このような議論を福沢はしていることから、この「個人」は「人」は「天」の前における独立したひとりの存在となり、『交際』は、目に見えぬ範囲の多数の人々との平等な人間関係を意味するように変えられていく(『翻訳語成立事情』三五頁)ということになります。

柳父さんの考え方をこのように理解しますと、「社会」も「個人」も、OEDの第二の抽象的な、そしていわゆる私たちがいま使っている「社会科学」というような場合の「社会」とか、一般の「社会」といつているようなものにつくり変えようとする努力を福沢がしていたということになります。

2 小幡篤次郎

それに対して小幡はどのようであつたかということを申し上げたいと思ひます。小幡自身は、先程の住田さんの論文の結論によれば、「少なくとも『学者』『教育者』『理想』『沈黙考』という部分は彼へ小幡」が担つたと言つてもよいように思われるのである。そうした要素を担うべく、福沢の共同者として『知識見聞を積む』彼へ小幡」が存在したからこそ、福沢は『積テ随テ散スル』活躍をよく為し得たのではなかつたか。福沢自身『僕者学校之先生ニあらず、生徒ハ僕之門人ニあらず。之を総称して一社中と名け』というように慶應義塾を

単なる私塾にとどまらない自発的な共同結社と位置付けていたが、実際福沢の活躍は彼（小幡）のような良き共同者を得られたことに大きく支えられていたように思われる」（一六六頁）とされています。

しかし、西沢直子さんは、その随想「小幡篤次郎と交詢社設立」（『交詢雑誌』復刊四八三号、二〇〇四年四月）の中で、小幡が交詢社の設立にかけた想いについてさらに積極的な評価をされているように思います。それが、以下の文章です。

「小幡は上士階級のネットワークの中心にいて、いたからこそいつまでも前近代的士族社会が機能する現状を打破しないかぎり、近代化が進まない現状を認識していた。ゆえに人々が士族社会に替わって帰属意識を持つことの出来る組織をつくろうと考えたのではあるまいか。人々の新たな精神的支柱となり、正確な情報や知識を得る場となる組織づくりが、小幡の『同窓会』あるいは『旧友結社』結成の意図であったと考えられる」と。つまり、まさに小幡自身は自らの基盤である武士階級を打破しないと、平等は実現できないと考えるものの、その武士階級を打破すると自らの拠って立つ基盤が見つからない。その基盤を小幡はこの交詢社に求めたということ。福沢が「天」の前の個人の「平等」を考えたのに対して、小幡は世俗的・現実的平等主義者としての基盤こそがこの交詢社であったのではないのでしょうか。まさに「小幡は福沢を越えた平等主義的志向が存在していた」と言えると思います。それも世俗的・現実的社會において。

3 馬場辰猪

(1) 「社会論」

このような「天」の前の平等主義者福沢と世俗的・現実的な平等主義者小幡に比べて馬場辰猪はどうであったのでしょうか。『馬場辰猪全集』の第一巻に載っています馬場の「社会論」という論文を見てみましょう。

まず馬場は「今ニ至ルマデ純然タル社会ノ本邦ニ成立セシヲ見ザリシ」という、日本社会の現状分析を行い、その原因を「概括力」の欠如に求めています。その「概括力」を造り出すために、馬場はイギリスで「日本学生会」を組織し、「本邦ノ学士」自身によって「真純ノ社会ヲ結合」するために「共存同衆」を日本国内で組織したと考えられます。

このような発想は明らかにミクロの「society」からマクロの「society」を作るというものだと思うのです。さらに言えばマクロの「society」である「国家」という「社会」を、一つ一つの小さな、それゆえその実現が容易なミクロの「society」である「日本学生会」、「共存同衆」さらには「交詢社」から積み上げることで作りにけることに、馬場の大きな関心があったんだろうと思います。事実、馬場は「終ニ我日本七十余州三千五百万ノ人民ヲ団結シ以テ一大社会ヲ組成」すべきであると主張しているのです。

このような馬場の考え方を具体的に示しますと、共存同衆や交詢社の「社規」「社則」は「憲法」であり、その「社規」「社則」に従って「民主的な選挙」を行い、それによって「常務員」「常議員」という運営者を選ぶ。しかし「頭」つまり「天皇」は置かず、「権理を求め、義務を責め」る平等な「個人」によって成り立つ「法治国家」「民主国家」そのものの形成することを馬場自身が意図し、実際に実践しようとして政治運動に命をかけたのではないかと思っています。

五 おわりに

結論らしいものをお話する段階になってきました。日本における「society」つまり「結社」に最初に注目し

ました。その「結社」にはイギリス的結社、アメリカ的結社、フランス的結社などがあるのですが、「国家」と「個人」をつなぐ中間社会としての「結社」の役割を、私たちは十分に認識する必要があるだろうと思います。それは現代でも重要な「場」だと思えますので。今日、私自身は明治期の近代化の文脈の中で中間社会の重要性を問題にしてみました。もちろん今日は、馬場自身もついていた近代社会の形成のプロセスとその思想の特徴を福沢や小幡とのそれと比較しながら明らかにしようと思つておりました。

社会の最小単位である「個人」が、「権利と義務」を自覚しながら「独立」した「個」として自立し、その上で、彼らが「結合」することで、中間社会である「結社」——そこでは平等が実現されているはずですから——を立ち上げ、その「結社」が他の「結社」と「結合」し、最終的には「民主国家」を作り上げるというストーリーこそが馬場が考えていた「日本の近代化」のシナリオであったということです。

さらに指摘しておきたいのは、このような馬場の思想形成に際して、いずれも福沢・小幡・馬場という慶應義塾にかかわる三人の人びとが大きな役割を演じたということです。このデルタの日本の近代化をめぐる思想や実践には微妙な差があるものの、その目的実現に大きな役割を演じたことは確かだということです。

とりわけ「交詢社」という一つの組織をめぐって、福沢は「同窓会」のレベルで捉え、小幡はそれよりもさらに進んで、先程、西沢さんの結論を引用させていただきましたけれども、武士階級出身の人びとをも含めて当時の人びとが拠って立つ存在基盤をこの「交詢社」に求めたということです。その中で馬場は「日本学生会」「共存同衆」「交詢社」の設立と運営に積極的に参加しただけでなく、福沢や小幡が躊躇した政治運動へとさらに突き進んでいきました。これは萩原延壽さんが指摘されていますが、結社を活動の場とし、「演説」を通じて啓蒙するという方法に限界を感じた馬場は、しかし最後には、一人ひとりが演説会を開くという、「個人の

力」によって社会の新しい組み替えに努力しようと思いました。でもその夢もろくも破れたのだと思います。脱線ばかりしまして、あまり結論らしいことを申し上げておりませんが、しかし、明治期のこの三人は、もちろん慶應義塾という一つの学校といえますか、組織に属する人びとではありますけれども、彼らは慶應義塾を超えて「日本の近代社会の形成」に一定の役割を果たしたことを改めて強調しておきたいと思えます。舌足らずな報告で申しわけありませんでしたけれども、これで終わりたいと思います。どうもありがとうございます。